

学位論文審査結果の要旨

所 属	三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻（博士後期課程） 看護学領域 精神・ストレス健康科学分野	氏 名	まつい ようこ 松井 陽子
審 査 委 員	主 査 林 智 子 副 査 磯 和 勲 子 副 査 角 甲 純		
<p>（学位論文審査結果の要旨）</p> <p>論文題目：精神科病院におけるリカバリー志向の実践に向けた看護管理者のリカバリー志向を高めるための教育プログラムの開発</p> <p>著者らは論文において以下の内容を述べている。</p> <p>背景：精神保健医療分野においては当事者の人生の希望や目標を重視するリカバリー の概念を中心した支援が重要だと考えられている。欧米諸国ではリカバリー志向の実 践に関する研究が盛んに行われており、リカバリー志向が進んでいる。しかし、日本 では入院医療中心の文化や社会資源の不足などの課題があり、リカバリー志向に関す る研究は少なく、リカバリー志向は進んでいない。精神障害者のリカバリーを促進す るためには、精神科病院の組織変革が必要であり、そのためには看護管理者のリカバ リー志向を高めることが必要だと考えられる。</p> <p>目的：精神科病院における看護管理者のリカバリー志向を高めるための教育プログラ ムを開発し、その実施可能性を評価する。</p> <p>方法：観察期間を設けた対照群のない前後比較による介入研究デザインであった。対 象者は、教育プログラムへの参加の同意が得られた1つの精神科病院の看護管理者 （看護部長、看護師長、主任）9名であった。先行研究の成果をもとに、精神科病院 の看護管理者のリカバリー志向を高めるための教育プログラムを作成した。プログラ ムは全5回の構成であり、1回は60分程度、月2回の頻度で実施した。また、1回目 には病院の組織文化を分析するためにSWOT分析を実施し、4回目にはピアサポータ ーによるリカバリーストーリーの語り、5回目にはRappのストレングスモデルを活 用した事例検討を取り入れた。プログラム評価は、実施3か月前、実施直前、実施直 後、実施3か月後の4時点での質問紙調査とプログラム終了後の面接調査を用いて 行った。質問紙の項目はリカバリー志向性尺度（RAQ-7）、リカバリー知識尺度（RKI）、</p>			

であり、面接ではプログラムの改善点、参加したことによる自身の変化、組織スタッフの変化、課題の達成度について尋ねた。

結果：同意の得られた9名のうち、教育プログラムの全てに参加し有効回答が得られた6名を対象とした。対象者のRAQ-7、RKI得点は、教育プログラムの実施後に上昇したものの、統計的な有意差はみられなかった。面接調査では、【プログラムに参加したことによる管理者自身の変化】【プログラムに参加したことによる看護部の変化】【プログラムの学びと気づきの看護への活用】という成果につながるコアカテゴリーが抽出された。逆に、【リカバリー志向の実践に向けた課題の気づき】では「体験や知識の不足」という看護管理者の課題が語られた。さらに【プログラム評価】では「満足感」などの肯定的評価がある一方、「研修の内容を実践に反映させる難しさ」も語られていた。

本論文は、日本の精神障害者におけるリカバリー志向の実践の遅れに着目し、精神科病院のリカバリー志向を推進するために看護管理者のリカバリー志向を高めるための教育プログラムの開発を試みた独創的な研究であり、学術上極めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。